

令和6年度 経済環境常任委員会行政視察報告書

1. 視察日程

令和6年4月24日（水）

2. 視察先・視察内容

千葉県香取郡神崎町：スマート農業について

道の駅 発酵の里こうざきについて

3. 参加者

委員長 村嶋 照等

副委員長 藤崎 勇一

委員 小泉 英樹 飯嶋 重一 飯島 照明 鶴澤 治 油田 清

4. 視察の概要

◆ 千葉県香取郡神崎町 4月24日（水） ◆

【スマート農業について】

【道の駅 発酵の里こうざきについて】

スマート農業実証プロジェクト

実証実験の概要

実証課題名：千葉県香取地域における大規模水田輪作体系スマート農業実証

経営概要：91.3ヘクタール（水稻66ヘクタール、小麦25.3ヘクタール）

実証面積：91.3ヘクタール

実証実験の目標

「コメ生産コストを過去平均値から約1割の削減する」

（10,879円／60キログラム⇒9,600円／60キログラム）

①水稻の収穫向上

…過去平均値から約1割向上（515キログラム／10アール⇒563キログラム／10アール）

②作業時間の削減

…水稻・麦・大豆の総労働時間を9%削減（約1,350時間分）

導入技術

1. 自動運転トラクターによる耕起・代掻き作業の効率化

遠隔操作による無人走行や遠隔操作による無人走行や無人操作と有人操作を組み合わせたトラクターの2台同時走行により作業人員低減、作業の均一化を図る。自動作業能率を



考え、大規模ほ場での作業時間を 30～40%削減する。

使用機器：自動運転トラクター（クボタ S L 60 A）60 馬力

アタッチメント：ニプログラウンドロータリー

実証面積：85.9 ヘクタール（水稻 60.3 ヘクタール、小麦 25.6 ヘクタール）

2. オートステア装置による播種・施肥・耕運作業の効率化

既存トラクターに取り付けて、自動操舵技術による作業精度・作業時間の効率化を実現する。また、経験の浅い作業員の作業精度を上げる。

使用機器：オートステア装置（トプコン k i t - X 3 5 - A G I 4 - G E N 2）

実証面積：85.9 ヘクタール（水稻 60.3 ヘクタール、小麦 25.6 ヘクタール）

3. GPS 連動直線キープ田植機による労働力削減と作業の精密化

GPS 連動による作業精度向上、作業労力の低減を図る。また、収穫メッシュマップコンバインと連動した可変施肥により、経費削減と育成のムラ解消、水稻の収穫・品質向上を図る。

使用機器：直線キープ田植機（クボタ NW 8 S）8 条植 可変施肥

実証面積：水稻 50 ヘクタール

4. 遠隔水管理システムによる精密な水管理と労力の軽減

ほ場水位の確認と給水操作を遠隔で行うことにより水見回り作業の労働時間短縮を図る。また、遠隔制御することにより、毎日のほ場見回りを週に 1 回程度に削減、気象データと連動した適期の水管理により品質・収量工場につなげる。

使用機器：遠隔水管理システム（クボタケミックス W A T A R A S）

実証面積：水稻 60.3 ヘクタール

5. 農業用マルチローターによる作業効率向上と適期散布により品質向上

散布作業の簡易操作、効率化により労力を 70%削減。また、薬剤の適期散布による品質向上を図る。

使用機器：農業用マルチローター（クボタ MG - 1 S A K）

実証面積：85.9 ヘクタール（水稻 60.3 ヘクタール、小麦 25.6 ヘクタール）10 リットル
タンク

6. 食味・収量メッシュマップコンバインによる精密な収量分析

収量・タンパク値のメッシュデータを取得し、次期作への可変施肥技術に反映させ、他技術を組み合わせ現状の1割の収量増加を目指す。

使用機器：食味・収量メッシュマップコンバイン（クボタDR6130）130馬力 6条刈
実証面積：85.9ヘクタール（水稻60.3ヘクタール、小麦25.6ヘクタール）

7. 汎用ロボットコンバインによる労力軽減・収量分析

自動運転アシストにより作業者の負担軽減と最適ルール作業で効率化を図る。また、収量・水分等のメッシュマップデータを取得し次年度の施肥設計に反映させて高品質・収量向上を目指す。そのほか、経験の浅い作業者でも効率的な作業ができることを確認する。

使用機器：汎用ロボットコンバイン（クボタWRH1200A）120馬力
実証面積：85.9ヘクタール（水稻60.3ヘクタール、小麦25.6ヘクタール）

8. K S A S 乾燥システムによる乾燥調製作業の見える化

汎用乾燥機1台及び収穫コンテナとK S A S 乾燥システムを連携して、効率的な刈取、乾燥計画の立案と収穫から乾燥調製までの作業の見える化で作業効を上げ、経費削減を図る。

使用機器：K S A S 乾燥システム（K S A S ポート・コンテナ自動読取機等）
実証面積：85.9ヘクタール（水稻60.3ヘクタール、小麦25.6ヘクタール）

9. GPS-RTK基準局システム

補正データの配信用にN t r i p 方式の基地局を神崎町役場の屋上に設置して、スマートフォンで受信する。神崎町役場サーバー室に補正情報インターネット配信サーバーを設置している。

実証で生じた技術的課題（抜粋）

- ・自動運転トラクターのセンサー動作確認時の状態表示灯や確認ブザーなどにより認識の有無も判断可能としたい
- ・オートステア装置の高速（10キロメートル／1時間以上）でも安定した作業精度
- ・食味・収量メッシュマップコンバインの収量情報のさらなる精度向上
- ・今後は、生産者が安価に簡単に使える生育診断技術、ドローンの空撮等が求められる
- ・K S A S 乾燥システムに対応する乾燥機の拡充
- ・メーカーと生産者の連携をさらに密にし、引き続き現場の要望を元にした機械開発と夢のようなスマート農機の開発もさらに進めてほしい
- ・自動運転トラクターのほ場マップ等が営農管理システムK S A S と連携や自動日誌機能の追加

道の駅 発酵の里こうざきへの取組

概要

圏央道神崎インターチェンジのすぐそばに平成 27 年 4 月 29 日にオープン（道の駅としての登録は、平成 26 年 10 月 10 日）した「道の駅 発酵の里こうざき」は、千葉県内 24 番目の道の駅で、全国初の「発酵」をテーマとした道の駅。

日本酒をはじめとした発酵食品や新鮮な野菜といった神崎町の特産品はもちろん、全国から集められた発酵食品が手に入る市場や厳選された素地を使った発酵メニューが楽しめるレストランなどがある。平成 26 年度には、発酵文化の発信と圏央道と圏央道と国道の両方からアクセスできるゲートウェイとして国土交通省が選定する重点「道の駅」に選ばれている。



基本情報

- ・所在地：千葉県香取郡神崎町松崎 855 番地
- ・面積：面積 18,100 m²
- ・駐車場：170 台（大型車 23 台、小型車 145 台、身障者用 2 台）
- ・トイレ：38 器（男 20 器、女 16 器、身障者用 2 器）

運営方法

指定管理制度（指定管理者は、「株式会社発酵の里」）

施設

施設	営業時間	定休日
新鮮市場	9:00～18:00	—
発酵市場	9:00～18:00	—
レストラン オリゼ	10:00～16:00	木曜日
はっこう茶房	10:00～16:00	水曜日
コンビニ「ファミリーマート」	24 時間営業	—

「発酵」をテーマとしたまちづくり

平成 21 年から始まった「酒蔵まつり」を契機に「発酵」をテーマとしたまちづくりが始動した。「酒蔵まつり」は、300 年以上の伝統を持つ 2 軒の酒蔵を中心に、既存商店も含め、酒・みそといった発酵食品や地元農産物を始めとした 200 以上の店舗が歩行者天国となった街道 1 キロメートルに軒を並べ、直近の開催では約 6 万人が来場するほどのイベントに成長した。

この事業をきっかけに、「発酵の里」をキーワードとして町おこしを展開するようになり、平成 25 年 1 月には関東で初めて「全国発酵食品サミット」を開催するに至り、同月 5 月には「発酵の里こうぎき」を商標登録。同 12 月には「日本酒で乾杯条例」を議員発議で制定し、減少の一途だった中心街の新規出店も見られるようになり、「発酵」をテーマとしたまちづくりが着実に実を結ぶようになっていった

道の駅事業の位置づけ

メディアにもたびたび取り上げられ、「発酵の里」として徐々に知名度は上がっていったが、常に人が町に集まり継続した効果を維持できるような環境づくりが課題となっていた。

そのような状況下で、神崎 I C～大栄 J C T の開通により首都圏からの交通アクセス向上が見込まれる中、神崎インターチェンジに隣接した地に道の駅を設置する運びとなり、平成 27 年 4 月 29 日に「道の駅 発酵の里こうぎき」がオープンした。町と一体となってまちづくりを推進する目的から、町のキャッチフレーズである「発酵」をテーマとした全国初の道の駅であること等が評価され、国内で 1,000 以上設置されている道の駅の中で 35 の重点道の駅に指定された。

プライベート商品の販売

「道の駅 発酵の里こうぎき」では、農商工連携により製品化したプライベート商品の販売にも取り組んでいる。現在は、施設内に加工施設がないため、製造加工業者に町内産の農産物や一次加工品である糀など原料供給の橋渡しをして、新商品として販売するという手法でプライベート商品を造成している。製品化されたものには、町内産の大豆を使用した納豆や豆腐のほか、糀を使用したバームクーヘンがある。

イベントの開催

道の駅の生鮮市場棟の 2 階にある研修室を利用して、みそ作り体験やモッツアレラチーズ作り体験、藍染め体験といったさまざまな発酵に関する体験教室を開催している。

また、正月には、餅つきや大抽選会を行う「新春市」を開き、多くの人が訪れる。

今後の取組

令和 7 年度から令和 8 年度中に首都圏中央連絡自動車道神崎 P A（仮称）が道の駅と連結し、高速道路を降りずに、道の駅に立ち寄ることができる環境が整う見込みである。現在は、地盤改良工事と造成工事が進んでおり、道の駅施設についても改修を行う予定である。



【 質 疑 】「スマート農業について」

問 スマート農業実証プロジェクトの導入のきっかけは。

答 実証農業者の農事組合法人東部は、平成 26 年に「食味・収量コンバイン」を導入したことをきっかけに、営農管理システム「KASAS」を取り入れており、実証事業に取り組みやすい環境であったことに併せて、離農する農業者の増加から加速度的に経営面積が増え、さらに経営規模を拡大していくために、作業の省力化・精密化が必要となっていたことから、導入に至った。

問 スマート農業実証プロジェクトの国、県、町の補助金の内訳は。

答 農林水産省の事業だが、農研機構と委託契約を締結し、農研機構から支払われる委託料により、全額経費を支出したものとなる。

問 スマート農業実証プロジェクト共同事業体の役割分担と具体的な活動内容は。

答 共同事業体は、神崎町が代表機関となり、事業全体に係る執行手続を行ったが、実証事業者である農事組合法人神崎東部が各種スマート農機を導入し、実証内容におけるデータ取りを行い、進行管理役である香取農業事務所がNPO法人ちば農業支援ネットワークの協力を得て、データ分析を行った。

問 スマート農業は費用がかかるが、費用対効果で利益は出るのか。

答 実証事業は2年継続の事業で、終了時点では減価償却費が大きく利益を圧迫したが、面積規模の拡大と減価償却費の低減（定率法のため）により、実質的なコストの削減が図られているものと思われる。

問 谷津田への取組状況は。

答 実証農業者である農事組合法人東部の経営地の大半は、利根川沿いの平坦地であることから、畦畔除去によるほ場の大区画化とスマート農機の利用に関して恵まれた立地にある。谷津田地帯で直線キープ機能を搭載した農機具を使用している農業者もいるが、GPSの受信に難がある場合も多く、また、区画が小さいためスマート農機が効率的に利用できないケースもあるため、改良の余地が多く残っていると思われる。

問 後継者は育っているのか。

答 農事組合法人東部の年齢構成は大変バランスが取れており、若い農業者も就農している。

問 新人の技術、経営指導はどのようにしているのか。

答 実地による指導のほか、KASASで記録した栽培履歴による施肥量の確認などにも利用し、指導を行っている。また、スマート農機を利用することにより、作業内容によっては、経験の浅い作業員でも熟練した農業者と変わらない精度で作業を行うことができ、新人育成に関して、スマート農業技術は効果的なものと思われる。

問 米の販売先の新たな取組は考えているのか。

答 以前、輸入米の取組も行ったが、現在は行っていない。また、道の駅にも時期によっては出品し、「スマート農業米」として販売している。米の販売先は限られているが、大豆に関しては、地元のみそ製造事業者や成田市内の豆腐事業者、道の駅で販売している「神崎納豆」の原料供給なども行っている。

問 今後の展望は。

答 令和6年度から自動運転田植機を導入しさらなる効率化を図ることとしている。また、田植機のアタッチメントを除草機に交換し、本田除草の作業を行うことで、有機米の作付に向けた取組を図る予定である。

【 質 疑 】「道の駅 発酵の里こうざきについて」

問 昨今メディアでも取り上げられているが、情報発信はどのような手段を使ったのか。

答 イベントの際は、県庁や空港の記者クラブに情報提供をするが、媒体を使ってというよりも「発酵」というテーマがメディアの方にうけているところがある。ありがたいことに、先方からいろいろなお話をいただいている状態である。

問 外国人観光客はどの程度来ているか。

答 コロナ前で、年間 6,000 人程度が来ていた。コロナ後は、来なくなってしまったので、数字をつかんでいない。訪れる外国人観光客に聞くと、空港でレンタカーを借りて訪れているようである。今後高速道路のPAとつながると観光バスも停まってくると思うので、さらに増えると期待している。

問 近くに「直売所しもふさ」、「道の駅 水郷さわら」などがあるが、道の駅を造る時、どのように意識したのか。

答 一番配慮したのは、農家の方が野菜などを出荷する際の委託販売手数料をいくら取るかで、周辺施設の手数料を調べた。現在、野菜などの生鮮品については、町内 15%、町外 18%の手数料を設定している。

【 委員所感 】

◆ 小泉 英樹 委員 ◆

「道の駅 発酵の里こうざきについて」

千葉県香取郡神崎町にある「道の駅 発酵の里こうざき」へ行政視察を行った。全国初の「発酵」をテーマとし、圏央道神崎インターチェンジのすぐそばに平成 27 年 4 月に千葉県内 24 番目の道の駅としてオープンした。テーマの「発酵」については、この地域が利根川水系の水源と平坦で肥沃な大地によって米や大豆が育つ穀物地帯であったため、また長期間保存可能であるところも注目され、江戸時代より米や大豆を原料とした酒、みそ、しょうゆ等の発酵文化が育まれたとのことである。

施設には「新鮮市場」「発酵市場」「レストラン」「コンビニエンスストア」（24 時間営業）等があるほか、研修室を利用した「みそ作り」や「モッツアレラチーズ作り」といった発酵食品の体験教室をイベントとして開催していて、正月には「新春市」が開かれ多くの人を訪れる。以前の神崎町は内向き行政を行っていたこともあり、外客の姿を見ることはほとんどなかったそうだが、酒蔵まつりをきっかけに始まった「発酵」に関する取組により来客数は増え、道の駅開設後は劇的に増加した。

平成 21 年（約 7 万人※酒蔵まつり初回来客 2 万人含む）

平成 27 年（約 52 万人※道の駅開設）

令和元年（約 90 万人）

令和 2 年（約 75 万人※感染症の影響により減少）

現在ではコロナ禍前の水準に戻っているようで、平日にも関わらず駐車場の大部分が埋まっていて、「道の駅 発酵の里こうざき」の集客力には大変驚いた。

「道の駅」施設は令和 5 年 2 月時点で全国に 1, 204 駅を超え、少し前のデータになるが 2014 年に地域活性化センターがまとめた「全国道の駅アンケート調査報告書」によれば約半数近い駅が「売上の低迷」を課題としていたが、「道の駅 発酵の里こうざき」では近々で、年間約 8 億円の売上とおよそ 2, 000 万円の利益が出ているとのお話があり「自立経営の視点」をしっかりと持った施設であることが伺える。

自立した経営力のある道の駅に求められる要素として「情報発信」や「立地」等が挙げられるが情報発信においては「発酵」という唯一無二のテーマを武器に、神崎町として情報発信する以上に各メディアが「健康」を「発酵」と結び付け、広く全国に情報発信されているようである。これは「発酵」というテーマがいかに強いかを思い知らされるのと同時に、テーマそのものの大切さを考えさせられる。

また、立地においては視認性が高い場所であり、将来における拡張性についても十分対応可能な場所であった。今後、圏央道神崎パーキングエリア（仮称）の供用見込みもあり（令和 7 年に内回り、令和 7 年～8 年に外回り供用見込み）国土交通省からは一日あたり 2, 000 台を超える車両が乗り入れるだろうとの話もあったそうで、今後さらなる集客で神崎町「道の駅 発酵の里こうざき」が全国からさらに注目を浴びていくだろうと思われる。

我々もしっかり「道の駅 発酵の里こうざき」の今後の取組について注視していきたい。

◆ 飯嶋 重一 委員 ◆

「スマート農業について」

今回視察した農事組合法人神崎東部は、農林水産省、JA、(株)クボタ等の支援を受けての取組である。トラクターは無人のロボットトラクター、田植えは直進アシストがついているので素人でも真っ直ぐ走れ、可変施肥機能付きで、メッシュマップコンバインのデータにより肥料を調整できる。水管理は遠隔水管理システム。コンバインは、メッシュマップコンバインにより場所ごとに収量を計算しデータを取ることができる。

機械は高価であるので、最低 100 ヘクタール以上でないと経営上は費用対効果でメリットが無いと思われる。

データを管理するにも収量が取れない原因が小肥によるものなのか、倒伏、多肥によるものなのかメッシュマップコンバインでは正確に理解できない。その辺はどうしても経験や現場を見る必要があり、人間によりデータを修正する必要性がある。

また、ドローンの防除は適期に防除ができるので、1 等米の比率を上げる上で効果が高い。ICT 農機は普及すれば値段が下がり、ますます普及することが予想される。

現在は補助金で買っているので採算がとれているが、コロナ禍で米価が下がった時には収入保険でまかなったとのこと。

収入保険は過去の収入の 90%しか助成しないので米価が下がった時の農業は厳しいものがあり、高価な機械を導入する現在において、補助金に頼らず、安定的に経営を継続するにはオークションのように最低販売価格を政府が決める必要があると考える。昔そういう時代があった。また、収入保険は 90%から 95%に引き上げるべきと考える。

少子高齢化、人手不足の現在、食料自給率向上のためには国民の理解と、農業における女性の進出を期待したい。

◆ 藤崎 勇一 副委員長 ◆

「スマート農業について」

経済環境常任委員会の所管事務調査は『農業の担い手不足の解消』がテーマであり、「発酵の里こうざき」と呼ばれるお隣の神崎町で、

①担い手不足などにより受託面積が加速的に増えている中で、作業時間の増大・作業員の負担が増加している

②作業員の作業技術の差により作業むらが生じる

③作物の潜在能力を最大限生かすため、食味、収穫、収量メッシュマップ機能や過去のデータに基づいた精密農業を進めなければならない等に対応するためスマート農業を取り入れた新しい農業経営を実証している農業組合法人神崎町東部の取組について視察してきました。

まず、実証結果・課題の説明を神崎町役場にて受けた後、天候不順のため苗を植えることはできませんでしたが、自動運転田植機に試乗してきました。

スマート農業導入のきっかけについては、農事組合法人神崎東部が、平成 26 年に「食味・収量コンバイン」を導入したことをきっかけに、営農管理システムを取り入れていた

ため、実証実験に取り組みやすい環境であったことと併せて離農する農業者の増加から加速度的に経営面積が増えたこと。さらに、経営規模を拡大するためには、作業の省力化・精密化が必要であったことから、スマート農機の導入になったとのことでした。

また、令和元年から2年にかけて採択を受けた「スマート農業技術の開発・実証プロジェクト」に関しては、農林水産省の事業で農研機構と委託契約を締結し、農研機構から支払われる委託費により、全額国庫補助であったとのことでした。

そして、令和6年度作から、自動運転田植機を導入しさらなる効率化を図ることとしており、また、田植機のアタッチメントを除草機に交換し、本田除草の作業を行うことで、有機米の作付けに向けた取組を図る予定であるとのことでした。

担い手不足の解消に対する後継者の育成については、神崎東部の年齢構成は60代から20代までと大変バランスが取れており、若い農業者も就農するとともに実地による指導のほかK S A S（株式会社クボタ）で記録した栽培履歴による施肥量の確認なども活用して、指導を行っています。また、スマート農業を利用することにより作業内容によっては経験の浅い作業員でも熟練した農業者でも変わらない精度で、作業を行うことができて新人育成には、スマート農業技術は効果的であるということでした。

スマート農業は、ロボット・AI等の先端技術を活用して、省力化・精密化や高品質生産を実現する等を実現する新たな農業であり、担い手の高齢化が急速に進み、労働力不足が深刻となっている中では、スマート農業を活用することにより、農作業における省力・軽労化をさらに進められることができるとともに、新規就農者の確保や栽培技術力の継承等が期待される効果があります。

成田市としても農業従事者の高齢化や担い手不足、農産物の消費・流通構造の急激な変化に対応するためにも、スマート農業を含めた農業者の労力軽減策や農業支援策（神崎町の農業支援策：親元就農機械等整備支援事業補助金等）について、農業関係団体等との連携を図りながら積極的に支援する必要性を強く感じました。

◆ 飯島 照明 委員 ◆

「道の駅 発酵の里こうざきについて」

神崎町では圏央道の4車線化に伴い、神崎インターチェンジ付近に神崎パーキングを整備する予定となっており、そのパーキングが道の駅「発酵の里こうざき」と連携したものになることで、周辺の道路整備等が進められていました。道の駅としても今後はパーキングとの連携が進められるとのことにより一層の集客を見込んでいるとのことでした。

こちらの道の駅の特徴としてはまずは立地条件があると思います。国道356号に面し、神崎インターチェンジ隣接という好立地は非常に恵まれていると感じました。また「発酵の里こうざき」というネーミングと、発酵にフォーカスした取組もポイントであると思います。実際、発酵をテーマとした道の駅は全国には神崎町にしかないとのことでした。

本市でも今後、新市場内に集客施設を整備していくにあたり、特徴を持たせることは必須であると感じました。

◆ 鵜澤 治 委員 ◆

「スマート農業について」

令和2年農林水産省採択で、実証プロジェクトに着手、2か年継続事業の終了時点では、減価償却費が大きく利益を圧迫している状況だが、面積規模拡大と減価償却費の低減（低減法のため）により、実質的なコスト削減が図られているとのこと。赤字収支上の処置は、国庫負担で補てんする）

今後の展望は、令和6年度から、自動運転田植機を導入し、さらなる効率化に取り組む方針です。スマート農業事業採択は、全国217か所で取り組まれています。事業収支、担い手の要望など事業検証報告を求めたいと思います。

農林水産省は、20年後の農業従事者が、現状の4分の1の30万人にまで激減すると予測しています。農業と農村の再生にとって、最大の課題は、高齢農業者の大量リタイアが避けられない中で、新規就農者を大量に育成・定着させることです。昨今にあって、都市部の若者が、農村に移住し、就農する動きが広がっています。この希望ある流れを本格的に強めるために、大小多様な担い手・青年就業者の確保・育成を社会全体の取組として位置づけるべきです。

また、担い手の減少対策として、ロボットやドローン、AIなど、先端技術を活用した「スマート農業」の推進です。しかし、「スマート農業」が可能なのは、極めて限られた地域、条件の下なので、成田市でも十分検討した上で、推進すべきだと感じました。

◆ 油田 清 委員 ◆

「道の駅 発酵の里こうぎきについて」

口 5,687 人の小さな町がその特徴を生かして、果敢に挑戦している姿を感じた。もともと利根川の水産業が盛んだことから、酒・みそ・しょうゆなどの醸造業が発達していたものの、農業が基幹産業で人口減も進んでいた町。

外への発信力が示されたきっかけは平成21年の「酒蔵まつり」、今では5万人を呼び寄せる人気となっている。これをきっかけに「発酵の里」をキーワードに事業を展開。そして平成27年には道の駅「発酵の里こうぎき」をオープン。発酵をテーマとして全国発の道の駅として、国内で1,000以上設置されている道の駅の35の重点道の駅に指定されている。健康や長寿をイメージする「発酵」が、功を奏した感がある。その後、発酵体験教室として、みそづくり教室などが取り組まれている。そして道の駅では、東京駅直結高速路線バスを利用した銚子漁港との連携や、自店舗での販売が主業となっている事業者の販路拡大など、すべてがうまくいっているとは思えないが、「発酵」というイメージ戦略の重要性を学ぶとともに、このことを契機として内向きから外向きへ転換していく姿勢が感じられた。

今後は圏央道神崎PA（仮称）が道の駅と連結し売り場面積も3倍になるという。そうすると特に東京方面への利用者に対しては、千葉県の顔としての役割を果たすようになっていくのではないだろうか。小さな町の大きな挑戦を感じる。

現在、成田市には道の駅はない。本市には多くのスーパーそして何より公設地方卸売

市場がある中で、生鮮食料品の新たな魅力を打ち出すことができるのか。「発酵の里こうぎき」のような成田ならではのコンセプトを打ち出すことができるのか。そう考えると、卸売市場の集客施設棟がその役割を担っていくのがベストではないだろうか。

【委員長所感】

今回の視察では、近隣自治体である神崎町の農業の現場における先進的な取組と今や国内でもその名を知られた「道の駅 発酵の里こうぎき」を視察させていただきました。「スマート農業について」

まず始めにお伺いしたスマート農業については、新聞やテレビで知ることはあっても実際に目にするのは初めてでした。

庁舎内の説明では、スマート農機の高い精度を知ることができました。例えば、自動運転田植機の誤差は、わずか2センチメートルとのこと。実用時は、人の経験による修正作業を織り交ぜて高度な技術を取捨選択しながら技術を取り入れていました。スマート農機の利点は、高い技術にあり、経験の浅い作業者が使用しても効率的な作業を実現できる点は、今後の農業に可能性を感じました。現地においては、丁寧な説明はもとよりわざわざ、体験乗車ができるように水を入れない田んぼを用意してくださいました。おかげさまで、私を含めて何人かの委員が人生初めての経験として、自動運転の田植機に乗車することができました。実際その感触は、ここまで進んでいるのか、との思いでした。

「道の駅 発酵の里こうぎきについて」

次に、お伺いしたのは、近くにある「道の駅 発酵の里こうぎき」でした。こちらは、以前に何度か訪れたことがありましたが、改めて中の商品を拝見しますと、やはり無添加で体にやさしい食品ばかりでした。今、成田市でも給食に有機野菜の使用が推奨されていますが、こうした発酵食品も是非取り入れてほしいものです。

神崎町では、酒蔵まつりを契機としてまち全体が「発酵」をキーワードに発展しており、今後は、令和7年度から令和8年度中に圏央道神崎PA（仮称）との連結予定で、さらなる道の駅への来場者が期待されます。一つのきっかけが大きく飛躍する事例は、本市においてもヒントになればと思います。

今回は、身近なところでの視察でしたが、担当者の方々の心のこもった説明や取り計らいに感謝すると同時に、素晴らしい視察ができてよかったと思います。

経済環境常任委員会
委員長 村嶋 照等